様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：３５４１３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ０２０６３

研究課題名（和文）軍港都市が築いた地域子育ての構造-口述史と建築・都市生活空間の解析から-

研究課題名（英文）The Structure of Community Child-Raising in a Military Port City: An Analysis Based on Oral Histories and Architectural and Urban Living Spaces

研究代表者
江口　千代（Eguchi, Chiyo）

広島国際大学・看護学部・准教授

研究者番号：１０５２７７３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、かつて軍港都市であった「呉市」が、戦中から戦後復興期に変遷する過程の「地域の子育て」の実態や特徴を人々の口述史から明らかにするとともに、子育てに影響した建築・都市生活空間を分析した。それらを通して、軍港都市が築いた地域子育ての構造を検討することを目的とした。その結果、当時の呉の地域子育ては、海軍拠点の軍港都市として整備され、敗戦後もそれを一部引き継いだ都市機能の中でおこなわれた。子どもは、軍港都市特有の制度・政策環境、教育環境、物理環境、そして多様な人材の流入出による社会環境の変化といった子育て環境の中で育まれ、広い視野で学びと多様性を経験していたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
わが国の子育てに対する支援策は、少子化対策の一つとして重要なものである。国外の子育て支援策は、地域のニーズや地域性に応じて整備が行われている一方で、わが国では全国一律的で地域の特徴やニーズを十分に反映しているとはいいがたい。そのため本研究は、国内外で推進される地域の特徴に応じた子育て支援を構築していくうえでの基礎的視座となることを目指した。本研究では、時代の変遷の中にある地域の子育て環境の中で、当時の社会状況や地域の文化の中にある地域子育ての構造を確認でき、地域の特徴に応じた現代の子育て支援策への示唆を与えうる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified the reality and characteristics of “community child-raising” in the former military port city of Kure as it transitioned from wartime to the postwar reconstruction period based on oral histories from local residents. We analyzed the architectural and urban living spaces that influenced child-raising to examine the structure of community child-raising established in Kure. The results show that community child-raising in Kure was developed as part of the functions of the military port city, which served as a naval base, and continued as an urban function even after defeat in the war. Children were raised in an environment shaped by institutional aspects and policies unique to military port cities, such as an educational environment, physical surroundings, and a changing social environment due to the influx and outflow of diverse human resources. As a result, children underwent learning and encountered diversity from a broad perspective.

研究分野：社会学、地域看護学、ライフストーリー研究

キーワード：地域の子育て　子育て環境　子どもの生活　ライフストーリー　軍港都市　都市生活空間

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

わが国では少子化がすすみ、子育ての孤立や子育ての不安感、負担感が増大している。こうした中、親子への多様な関わりを充実させた地域ぐるみの子育ての在り方が求められ、子育て環境の整備は急務である。特に都市では、地域ぐるみという環境自体が難しく、地域住民が否応なく保育所などの公的施設に依存することになりがちである。国外では地域のニーズや地域特性に応じて整備が行われ、子どもと家庭の身近な場所で地域の資源を活用した実践が効果的に取り組まれている。一方で、国内では子育てと地域のつながりを基盤にした支援策を構築しようとしているが、今後もまだ改善の余地がある。

研究代表者は、これまで地域の特徴が独自の子育てを形成していることを明らかにし、その現状から地域の特徴に応じた子育て支援について言及してきた。子育て支援は、地域性を越えてまるごと一般化できるものではなく、その地域に根付いた歴史と地域の持てる力を発揮する中で、地域の特徴に応じた役割を果たすことを考えなければならない。こうした中、歴史をさかのぼると、都市においても地域ぐるみの子育てが顕在していたことが伺える。かつて軍港都市であった「呉」がその一例であり、プレ調査によると豊かで寛容な地域ぐるみの子育てが行われた環境であったという。

「呉」はわが国最大の海軍工廠として栄えた軍港都市で、原爆を投下された「Hiroshima」から約 20 ㎞の場所に位置している。国内外に知られる「Hiroshima」の原爆投下は「Negative Legacy」として世界的に有名であるが、軍港都市「呉」の果たした役割についてはほとんど知られていない。戦前・戦中は海軍が全体的な統括をおこない、戦艦大和を建造出港させ軍の重要な役割を担っていた。戦後は、その役割が変化し培われた生産技術を駆使して、造船業や鉄鋼業などの基幹産業でわが国の経済を支えたといわれている。こうして軍港都市から近代都市へと変遷する中で子どもの子育てについても軍港都市独自の地域の特殊性があったと考えられるが、その詳細はよくわかっていない。そこで本研究では、かつて軍港都市であった「呉」を研究対象地域とし、子ども目線での生活を当時子どもだった地域住民のライフストーリーの分析と、都市生活空間を歴史的資料により分析しながら、地域子育てを明らかにしたうえで、子どもたちが過ごした地域の特殊性に基づく地域子育ての構造を検討することにした。

２．研究の目的

本研究は、かつて軍港であった「呉市」を研究対象地域とし、戦中から戦後復興期にかけて都市が変遷する過程で営まれた「地域子育て」の実態や特徴を当時の子どものライフストーリーから明らかにし、「地域子育て」に影響を与えた建築・都市生活空間を分析する。それらを通して、地域の子育ての構造を検討し、その様相を総合的に解明することを目的とした。本研究では、ライフストーリー法を用いて、個人の生活史から地域独自の生活像を掘り出し、軍港都市がもたらした子育て環境に着目する。これらを通して、地域の特徴に応じた子育て支援を構築していくうえでの基礎的視座となることを目指した。

３．研究の方法

本研究の具体的な研究方法は以下の通りである。具体的な手順は、次の 4 点である。

(1)　軍港都市から近代都市(平和産業港湾都市)に変遷した地域の特殊性を明確にする

呉市史の編集資料や残存する写真、資料を利用して地域の特徴を明確にする。

(2)　子育ての実態、地域コミュニティの特徴と役割を明確化する。

当時子どもだった呉市に居住する地域住民の口述史を 75 歳以上の高齢者の方 10 名、70 歳以上の方 5 名、そして、周辺情報として自治体職員複数名に呉住民の生活、当時の子どもの生活やその地域に伝わってきた伝承を聞き取る。こうした語りから、家族・近隣・自治会・労働・消費・行事・子どもの習い事・遊び、また教育・医療など子育ての実態やその資源、地域コミュニティの特徴とその役割について明確にする。

(3)　子育て環境へ影響した建築・都市生活空間を明確にする。

地形図・住宅地図・地形・地図資料・空中写真をもとに、教育施設・医療施設・下水道の発達・交通網の発達などを通して子育てに影響を与えた生活空間を明確にする。

(4)　軍港都市「呉」における子育の仕組みを検討する。

研究進行中「子育て環境とは何か」という新たな問いが生じた。そこで、当初の研究計画から変更し、「子育て環境とは何か」を明確にした上で、かつて「軍港都市」であった呉の「子育て環境」の中でどのように子どもたちが生活してきたのかということを検討した。1)2)3)を子育て環境の中に統合し、地域子育ての構造を検討した。なお、ここで述べる「子育て」とは親が子どもを育てるだけに限らず、家族や地域の中で子どもがどのように育ったかということを意味する事とする。

４．研究成果

(1) 軍港都市「呉」の地域の特殊性

軍港都市とは軍事目的に利用される特別な湾港で、海軍の鎮守府ならびに海軍工廠（その前身となる組織・施設）の設置を有する都市として位置付けられている。

明治初期、もともとは漁業を営む小さな村落が、その立地条件と瀬戸内海に面した穏やかな気候から海軍がこの地形に目をつけたことで「軍港」としての役割を担うことになった。この間、海軍工廠を携えた都市として多くの職工を抱え、戦前・戦中と日本全国から仕事を求めて人々が集まり、わが国の軍事や経済を支えてきたともいえる。軍港都市「呉」の最大の地域の特徴は、敗戦後の連合軍の呉への進駐である。市民がアメリカ占領軍に慣れてきたころ、それに代わるように、英連邦占領軍（以下 BCOF）と呼ばれるオーストラリア軍、イギリス軍、インド軍、ニュージーランド軍が進駐した（呉市史編纂委員会 1995：662)。これらの軍は、フラタニゼーションポリシーを携え、占領地であるわが国の女性との交際を禁止したほか、BCOF の兵士の進駐先における行動指針を発令していた(呉市史編纂委員会 1995：709-713)。

呉市民が BCOF の進駐に慣れ、撤退を考えていたころ、昭和 25 年 6 月に朝鮮戦争が勃発し、BCOF は日本からの撤退を延期し、他国との戦争に従事する国連軍として長い間呉の市民生活に影響を及ぼした。同年、旧軍港市転換法が施行され、呉市も戦争に出向する軍港としての位置づけから平和産業湾港都市として歩み始めるという様々に変遷した地域の特徴をもっていた。

(2) 軍港都市「呉」の子育て環境の中での地域子育て

子育て環境の構成要素は、その時代に政府や自治体などから発令され生活が営まれる「制度・政策環境」、子どもがあらゆる教育機関などで切磋琢磨され育つ「教育環境」、家族や地域住民との関わりの中で育つ「社会環境」、そして建築・都市生活空間の中で育つ「物理環境」であった。それぞれの環境ごとに軍港都市「呉」の地域の住民や子どもの生活を掘り下げながら地域子育てを記述する。

①　制度・政策環境

呉は、軍港、そして海軍工廠を携えていたからこそ、わが国の司令塔ともいうべき将校や軍人、そして技術者が多く流入した。高い建物もあり、街灯も華やかだったことは語りにもある。一方

で、軍港であったからこそ制度・政策も厳しかった。昭和 12 年「呉軍港と防諜規定」が制定されたあと、太平洋戦争が近づくというわが国のシナリオの中、徹底した機密保持対策がとられた。そのため、市民総ぐるみの監視体制が戦争終了まで続くことになった。これが地域の隣組などを強化した。住民は地域の高台から呉湾の景色をながめることを強く禁止され、呉市内の鉄道乗車の際にその景色が見えないように施された。市民生活を規制する法規は、昭和 15 年「呉鎮守府非常警衛規定」16 年「呉鎮守府戒厳施行手続」がさだめられ、住民の秩序が一般の司法・行政で維持できない場合に軍隊が介入するという生活となった。教育制度も短縮や労働の従事など大きく変化し、呉にあった海軍工廠に多くの子どもが勤労奉仕をすることになり、他地域からも若年者や労働者が流入した。敗戦後は GHQ 主導によって、制度・政策環境が変化し、呉には英連邦軍が占領軍として進駐した。その後「軍港市転換法」が昭和 25 年に制定されるまで混乱の中での生活となったが、英連邦占領軍が発令したフラタニゼーションポリシーによって比較的地域の秩序が保たれたといえる。呉は軍港都市特有の制度・政策環境から、占領軍の制度・政策環境、そして平和産業港湾都市へとシフトする中に、住民や子どもの生活があり、その中で地域子育てが行われていた。

② 教育環境

研究対象者の 1935 年生まれから、1944 年生まれの男女 10 名は、敗戦直後に子ども時代をすごしたいわゆる「焼け跡世代」に属した。このうち、1935～39 年生まれは、国民学校への入学経験者であり、敗戦から 10 年余りの間に小学高学年・中学・高校時代を経験した。それに対して、1940～44 年生まれは、1947 年に成立する新教育制度の下で、新制小学校へ入学し戦後の 10 年間を主に小・中学校で過ごした。研究対象者の 10 名中 5 名が幼稚園の通園を経験している。1945 年の 7 月の呉空襲で、呉市内の国民学校 11 校が全焼・全壊となり敗戦後すぐに使用できたのは、3 校であった。

戦後 GHQ の指導による教育改革によって、教育体制は小中高の 6・3・3 制となり、1947 年には国民学校から小学校に改称、新制中学までが義務教育化された。戦前の教育制度では、尋常小学校の低学年を除いては男女別学であったが、新教育制度になり、男女共学となった。呉に特有とみられる語りの 1 つは、親世代の学歴の高さ、教養文化の素養であった。全国的に高校進学率が半数に満たないときに、語り手全員が進学しており、9 名が高校へ進学、男女を問わず 4 名が大学などの上級学校へ進学をしていた。親世代の教育の高さは、自ずと子どもの教育にも理解を示すことに反映され、占領軍の基地や占領軍兵士によってもたらされた事物のあこがれや展望などは、教育環境の中にも影響していた。

③ 社会環境

海軍の拠点となった呉の中で、戦中・そして戦後を迎えた子どもたちは、親・きょうだいといった家族だけでなく、地域に居住していた人々との関係性を築きながら様々な経験を積み重ねた。この社会環境とは、人との関係性の中で成立した環境をいう。家族の中の子どもの生活は、親やその兄弟も空襲で亡くなる、戦争にとられる、きょうだいと離れて疎開先にいくなど家族と離れて生活することも日常であった。子どもの親の職業である当時の社会階層ごとに育ちの語りを分類すると、海軍職業軍人の子ども、商人の子ども、職人の子どもと 3 層に分けられた。呉の子どもの生活の多くは、親の職業などで食料の入手状況が異なっていた。親が職業軍人の子どもや敗戦後占領軍の仕事を請け負う技術力のある親の子どもは、比較的戦後も食糧に困ったことがなかったと語った。一方できょうだいが多かった職人の子どもは、当時の配給だけでは空腹を満たすことができず、親と一緒に闇市などで食料を手にした。1946 年呉海軍工廠が閉鎖され、播磨造船所呉船渠開所となったが、翌年には従業員に食料などの「買い出し休暇」を与えられ、

物資の確保が優先とされるほどであった。当時の子どもたちは、「家族を支えるために動く」という感覚をもっており、これが家族間のつながりや絆を強めていた。また比較的裕福に育った商人の子どもは、親が商売に忙しく働いており海軍から請け負う仕事の影響で欲しいものはある程度手に入る状況にあった。しかし、子どもの内面を満たすのは物質の過不足ではなかった。子どもの生活が満たされたのは、親と過ごした日常、家族と過ごす生活そのものであった。

地域の中での子どもの育ちには、この地域に特徴的な英連邦軍兵士(以下、占領軍兵士)との交流があった。子どもたちは、通学途中に占領軍兵士のやさしさを受け取る、地域で言い伝わっている流言とは異なるやさしさを感じる、占領軍兵士の家族との交流で生活水準の差や、新しい時代の到来を感じる、国力の差を感じる、敗戦国だと再認識するなど、地域に特徴的な環境の中で様々な多様性を意識する関わりを持ちながら育っていた。

④　物理環境

呉は、その地形が軍事、特に軍艦の寄港や建造に適しているとされ、軍港都市として大規模な開発がすすめられた。開発は主に、海岸沿いと平坦部で行われ、軍関連施設を中心に港湾、工廠、官舎などの施設建設と道路や燃料、水道、交通（鉄道）の建設がすすめられた。そのため都市としての基盤が整備されるにしたがって、人口が増加し、それに合わせて都市建設、住居の建設も必要となった。さらに商業地、教育施設、水道やガスなどの都市インフラ、交通の整備も必要となった。想定以上の人口が増加したためそれに対応できる都市計画の適用をおこない、公共施設や都市インフラが整備されたが、居住空間は十分に確保することができなかった。これは、平坦部の住宅建設が容易ではなく、その多くが高地部の斜面地にスプロール的に住宅が建設されたこと、現在の衛生都市のように離れた都市に居住し、通勤するライフスタイルができるほど交通手段が整っていなかったこと、人口増加が急激であったことなどが理由としてあげられる。戦後の混乱期に子育ての物理環境に多くの問題や課題があったが、戦前までに築かれた道路や橋梁、高地部分の学校や病院、上水道施設、そして住宅などの施設や建物が部分的であるにせよ機能していた。子どもは、こうした物理環境の中で育っていたことが明らかになった。

以上のように本研究では、かつて軍港都市であった「呉」の地域の住民や子どもの生活からその子育ての様相を明らかにした。軍港都市という特徴の中で「制度・政策環境」「教育環境」「社会環境」「物理環境」というそれぞれの環境が当時の「子育て環境」として成立した。日本各地から集まった士官や軍港関係の技術者・職人家族、そして戦後占領軍の進駐、駐留を受け入れてきた地元住民が一体となり、「地域文化」を醸成する中で、地域子育てが行われていた構造があったといえる。今後は、これらを手がかりにして現代の子育て環境に地域の特徴を活かした子育て支援の仕組みの検討をめざしたい。

＜引用文献＞

①呉市市史編纂委員会『呉市史第 8 巻』，呉市役所，1995，p662．
②前掲書，pp709－713．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 江口千代，大庭悠希	４．巻 29(2)
２．論文標題 子育て環境とは何かー文献調査にみる子育て環境の構成要素と時代の変化	５．発行年 2024年
３．雑誌名 日本看護福祉学会誌	６．最初と最後の頁 187-194
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 江口千代	４．巻 8
２．論文標題 軍港都市「呉」に進駐した英連邦軍兵士と地域の子どものストーリー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 語りの地平　ライフストーリー研究	６．最初と最後の頁 109 -122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桜井厚	４．巻 8
２．論文標題 フィールドワークのリアリティ(上)	５．発行年 2023年
３．雑誌名 語りの地平　ライフストーリー研究	６．最初と最後の頁 161-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 桜井厚	４．巻 26
２．論文標題 「インタビューの社会学――ライフストーリーの聞き方」：二つのフィールドワークの経験をもとに	５．発行年 2021年
３．雑誌名 社会と調査	６．最初と最後の頁 114-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 橋本清勇	4．巻 36
2．論文標題 高齢化社会における住環境システムを考える―地域活動の経験を踏まえて―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本義肢装具学会誌	6．最初と最後の頁 168-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Chiyo Eguchi ,Seiyu Hashimoto	4．巻 2
2．論文標題 The structure of regional child-rearing developed by a naval harbour city-from the analysis of oral history and architecture/urban living space	5．発行年 2021年
3．雑誌名 Science Impact	6．最初と最後の頁 85-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21820/23987073.2021.2.85	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 江口千代	4．巻 vo 14
2．論文標題 看護学におけるライフストーリー研究の意義	5．発行年 2019年
3．雑誌名 語りの地平ーライフストーリー研究	6．最初と最後の頁 124-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 桜井厚	4．巻 vol 4
2．論文標題 研究手帖　社会調査における若干の問題点	5．発行年 2019年
3．雑誌名 語りの地平 - ライフストーリー研究	6．最初と最後の頁 139-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 桜井厚
2．発表標題 フィールドワークにおける調査研究者の隠された特権
3．学会等名 異文化コミニュケーション学会（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 大庭悠希，江口千代
2．発表標題 ある地域の戦中・戦後の子どもの生活環境ー他者との関係性の視点からー
3．学会等名 日本看護福祉学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 江口千代，橋本清勇，大庭悠希，桜井厚
2．発表標題 軍港都市がもたらした子どもの生活への影響―戦中・戦後を生き抜いた人々の語りから
3．学会等名 第18回オーラルヒストリー学会
4．発表年 2020年

1．発表者名 江口千代，橋本清勇，大庭悠希
2．発表標題 軍港都市の地域子育てー地域で生き抜いた人々の子ども時代の豊かさとは何かを探る
3．学会等名 第6回ライフストーリー研究夏期研究集会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 桜井厚（分担者），　サトウタツヤ，春日秀朗，神崎真美編	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 6
３．書名 質的研究法マッピング(担当部分；ライフヒストリー)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書として、江口千代編　『軍港都市「呉」の子育て環境を生きた子どもたちのライフストーリー』2024年3月発行(総ページ数119）を作成し、調査協力者や自治体、一部の地域住民に配布した。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	橋本　清勇 (Hashimoto Seiyu) (50273470)	広島国際大学・看護学部・准教授 (35413)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	桜井　厚 (Sakurai Atushi)	一般社団法人日本ライフストーリー研究所・代表理事	
研究協力者	大庭　悠希 (Oba Yuuki) (00806383)	西日本九州大学・看護学部・助教 (37201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関